様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年　６月　１日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520075
研究課題名（和文）　「徴候的知」の系譜をめぐる思想史的研究

研究課題名（英文）　A study of the genealogy of a symptomatic paradigm of knowledge from the point of history of ideas

研究代表者
田中　純（TANAKA JUN）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：10251331

研究成果の概要（和文）：本研究は、C.S.パース、S.フロイト、G.モレッリ、G.バシュラール、W.ベンヤミン、A.ヴァールブルク、九鬼周造などにおける徴候的知の様態を比較することにより、この知が情動と深く結びつくことによって発見法的な機能を果たすことを見いだした。さらに、ケーススタディとして、独学者的な芸術家・作家であるジルベール・クラヴェルにおける身体的情動と知的活動との密接な関連について調査と分析を進め、この観点から見た彼の知的伝記という形式で、その成果をまとめた。
研究成果の概要（英文）：Through the comparative analysis of a symptomatic paradigm in the works of C.S. Peirce, S. Freud, G. Morelli, G. Bachelard, W. Benjamin, A. Warburg, Sh. Kuki and others, I could confirm that this paradigm functions as a heuristic method if it is connected with one's corporeal affect. Furthermore, as a case study, I researched and investigated the life and works of an autodidactic artist and author, Gilbert Clavel, to clarify the deep connection between his corporeal affect and intellectual activities, and as a result, I wrote his intellectual biography from this point of view.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2011 年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
年度			
総　計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：哲学・思想史
キーワード：徴候的知、アビ・ヴァールブルク、ジルベール・クラヴェル、ダイアグラム、イメージ、発見法、アブダクション、情動

１．研究開始当初の背景

イタリアの歴史家カルロ・ギンズブルグは論文「徴候」（1979 年）において、ジョヴァンニ・モレッリの絵画鑑定法とフロイトの精神分析、そしてシャーロック・ホームズの推理に共通する、細部の徴候に着目した分析手法の背後に、1870 年代における医学的症候学に基礎を置く「推論的パラダイム」の（再）浮上を認めている。それは太古の狩人の文化にまで遡りうる知の系譜を描き出した点で劃期的な着眼であったが、ジョルジュ・ディディ＝ユベルマンが論文「形式的特異性の人類学のために」(1996 年)で批判するように、精神分析における「症候」概念の認識論的な特質を見落としているといった問題点のほか、渡辺公三が『司法的同一性の誕生』(2003 年）で指摘するごとく、指紋による個人同定法をはじめとする司法的同一性形成のため

の知との混同も孕むものであった。

本研究の研究代表者・田中純は、平成 12ー14 年度科学研究費（基盤研究Ｃ）「イメージとその記憶の分析に関する方法論の思想史的研究――20 世紀ドイツにおける図像学の成立とその背景」、平成 15ー17 年度科学研究費（基盤研究Ｃ）「イメージ分析における形態学的方法の思想史的研究――1920ー30 年代における文化科学の方法論とその背景」、平成 18ー20 年度科学研究費（基盤研究Ｃ）「イメージ分析に対する生命形態学の影響をめぐる思想史的研究」といった一連の研究を通じた、アビ・ヴァールブルクを中心とするイメージ分析の方法論に関する考察の蓄積を通じ、「神は細部に宿る」という言葉に代表されるヴァールブルクの分析方法を、精神分析的な症候概念を反映させた「徴候的知」の概念でとらえることにより、ヴァールブルクの称える「イコノロジー」の理解を深化させてきた。その成果は著書『アビ・ヴァールブルク　記憶の迷宮』のほか、複数のヴァールブルク論で詳述されている。

田中はさらに、今日の精神医学の見地から統合失調症親和者や鬱病親和者特有の認知回路を推定した中井久夫の『徴候・記憶・外傷』（2004 年）における考察を手がかりに、「徴候的知」の概念を発展させ、ヴァルター・ベンヤミンの都市論やアルド・ロッシの建築・都市論、宮本常一の民俗学、あるいは小村雪岱や萩原朔太郎をはじめとする芸術家の作品にこの「徴候的知」の表われを見いだす事例研究を積み重ねて、著書『都市の詩学』にまとめた。その過程で田中は、「徴候的知」が情動を誘発する認知形態であることの発見を、フロイトばかりではなく、C.S.パースや九鬼周造、ガストン・バシュラールといった哲学者のほか、ベンヤミンやロラン・バルトといった批評家の業績にも認めうることを発見した。さらに、美術史家バーバラ・マリア・スタフォードらが提唱する「神経系イメージ学」の検討を通じ、脳神経科学とイメージ分析を架橋する可能性が「徴候的知」の解明にあるとの見通しも得た。

こうした研究成果を踏まえ、田中は、精神分析やヴァールブルクのイメージ分析のほか、上述の哲学者の業績をはじめとした関連諸分野における思想史的動向を踏まえることで、ギンズブルグによる「徴候」および「徴候的知」の概念を批判的に見直して再定義し、中井やスタフォードらの研究を媒介として、この「推論的パラダイム」を現在の精神医学、認知科学、脳科学の知見のもとに吟味しようとする、本研究を構想するにいたった。

２．研究の目的

本研究は、次の５点を当初の目的とした。

(1)ギンズブルグによって提起された「徴候」および「徴候的知」の概念を再検討するため、「推論的パラダイム」が基づくとされた医学的症候学それ自体の変化を思想史的に検証し、フロイトによる精神分析の「症候」概念の認識論的な特質を明確化する。

(2) (1)で吟味された「徴候的知」の概念の展望のもとに、フロイト的な「症候」と同様に情動と深く結びついたヴァールブルクの「細部」や「情念定型（Pathosformel)」、あるいは、情動が強く作用する「発見の論理」としてのパースの「アブダクション」などを対象として、19 世紀末から 20 世紀にかけての学問諸分野における、「徴候的知」をめぐる認識論的な変容の構造を分析する。

(3)視覚世界への囚われから離れて、精妙で曖昧な匂い、触感、温感からなる世界に向き直ることにより、無限に連続する質の世界である偶然性・潜在性の宇宙をかいま見ることができるというパースの「連続性の哲学」や、同じく嗅覚が導く原初の偶然性と可能性の宇宙を重視した九鬼周造の「偶然性の哲学」などを、「徴候的知」によって把握された世界をめぐる存在論ととらえ、比較思想史的な視座から総合的に考察する。『空間の詩学』でバシュラールが論じている「予感の存在論」などもその検討対象に含まれる。

(4)「徴候的知」を統合失調症や鬱病の認知傾向と関連づけ、「予感」と「徴候」、「余韻」と「索引」といった概念によって分節化して、現前する世界の周縁で明滅する「メタ世界」の存在論・認識論へと展開した中井の「メタ世界」論を、(3)までの研究で得られた思想史的展望のもとに位置づける。そのため、中井が直接依拠している、記憶・想起の「パラタクシス」性をめぐる H.S.サリヴァンの精神医学理論や、安永浩の「ファントム空間」論を「徴候」や「徴候的知」との関係を中心に分析する。

(5)美術史と認知科学や脳神経科学との知見の融合により、表象としてのイメージが生成する次元を明らかにしようとする、スタフォードやカール・クラウスベルクらの「神経系イメージ学」の方法論的な吟味を通じ、そのような生成・発生の次元に対応する「徴候的知」の作用を、認知科学および脳神経科学との関連のもとに考察する。

３．研究の方法

当初の研究計画は、次の通り。

(1)平成 21 年度：いずれも 19 世紀後半ー20 世紀初頭を対象として、①精神分析の「症候」概念を中心とした医学的症候学とその「推論的パラダイム」の考察、②医学的症候学とヴァールブルクの「細部」や「情念定型（Pathosformel)」、あるいは「発見の論理」としてのパースの「アブダクション」といった発想との思想史的連関の検討と、これら学

問諸分野における「徴候的知」をめぐる方法論の分析、という２点について研究を行なう。
(2)平成 22 年度：①「徴候的知」によって把握された世界をめぐる存在論としての、パースの「連続性の哲学」と九鬼周造の「偶然性の哲学」の比較思想史的考察、②H.S.サリヴァンの精神医学理論や安永浩の「ファントム空間」論の検討を通した、中井久夫による「メタ世界」論の考察とそれに基づく「徴候的知」の概念の展開、という２点をめぐって研究を進める。
(3)平成 23 年度：認知科学および脳神経科学と密接に関係した「神経系イメージ学」の方法論的な吟味とその展望のもとにおける徴候的知の考察を行なう。

この間、初年度の平成 21 年度における研究の過程で、ヴァルター・ベンヤミンやジークフリート・クラカウアー、エルンスト・ブロッホといった批評・哲学の分野における「徴候的知」の体現者たちが、1920 年代初頭に南イタリア、とくにナポリやカプリ島で一種の知的コロニーを形成していたという新たな視点を得た。なかでもベンヤミンやクラカウアーが注目した、バーゼル出身でポジターノ在住の作家ジルベール・クラヴェルが、この知的コロニーの精神的環境を知るうえで鍵となる存在であることを見いだした。独学者的な芸術家・作家であるクラヴェルは、「徴候的知」のケーススタディとして恰好の対象であるところから、当初の計画に対して、クラヴェルの伝記的研究をさらに加えることとした。

４．研究成果
(1)フロイトの著作に即し、モレッリとのつながりを視野に収めた検証を行なう一方、モレッリの絵画鑑定における、徴候となる細部重視の実態と医学的知との関係を考察した。とくに、モレッリが学生時代に偽名で著わした、美術史研究と自然哲学・生理学・薬理学的研究のパロディである二つの著作(『バルヴィ大王』と『悪魔の瘴気』)を対象に、美術と医学という両分野の接点に徴候的知が深く関わっている点を見いだした。
(2)身体的な情動が仮説形成のような知的活動や記憶の想起につながるという現象を中心として、ヴァールブルクとパースにおける発見法的論理の無意識的なメカニズムを分析した。その結果、近年注目を集めているパースの遺稿における手書きのダイアグラムやスケッチなどが、ヴァールブルクの遺稿における類似のイメージと同様、両者に共通する徴候的知の無意識的メカニズムと関係しているという観点に達した。
(3)漠然とした感覚によって喚起される一種の徴候的知や、ミニチュア化＝縮小によって徴候的細部と化した対象が「予感」という形態で、現前する世界とは異なる世界を感知させる現象などをめぐる思想的な取り組みを、九鬼周造、パース、バシュラール、ベンヤミン、ヴァールブルクといった思想家の比較思想史的な分析によって総合的にとらえる作業を進めた。そのなかで、近年盛んになりつつある「ダイアグラム」をめぐる議論が徴候的知におけるミニチュア化と密接に関わり合っている点を発見し、ダイアグラムの創造を徴候的知に関連づけて、視覚的イメージが知的発見を促すプロセスへの展望を得た。これは、Horst Bredekamp などが提唱する像行為（Bildakt）の理論にも関連しており、さらに詳細な分析に値する点である。
(4)中井久夫による「メタ世界」論の吟味については、ドイツにおいてハンス・ウルリッヒ・グンブレヒトが展開している「潜在性（Latenz)」をめぐる研究が、メタ世界論と大きく重なるものであることを軸に、人文科学全般における「潜在性」の議論をメタ世界論と結びつける考察を試みた。グンブレヒトは潜在性というテーマの淵源が 20 世紀半ば以降のドイツ史や近年におけるメディア環境の変容にともなう時間経験の変化と関連していると論じており、このような視点から徴候的知の再活性化を歴史的に位置づける作業も進めることができた。一方、当初予定していた他の精神医学理論や神経系イメージ学との関係については、徴候的知との接点がいまだ十分に得られておらず、今後の課題として残されたと言わざるをえない。
(5)ベンヤミンやクラカウアー、エルンスト・ブロッホといった批評・哲学の分野における「徴候的知」の体現者たちが、1920 年代初頭に南イタリア、とくにナポリやカプリ島で一種の知的コロニーを形成していた点については、ベルリンのベンヤミン・アーカイヴで基礎的調査を進めた。ベンヤミンやクラカウアーが非常に注目したジルベール・クラヴェルについては、この知的コロニーの精神的環境を知るうえで鍵となる存在として評伝の形式で研究を深め、「徴候的知」をめぐるケーススタディとしての書籍刊行を予定している。クラヴェルにあっては、病弱であった肉体に随伴する身体的な情動が芸術的創造活動や作家活動における着想と深く関連しており、この点を詳細に追跡することがおのずと徴候的知創出のプロセスを明らかにすることになった。

以上のように、本研究は結果として、ダイアグラムなどの視覚的イメージが徴候的知の発現と深く関連している点を明らかにしたことにより、像行為論や潜在性をめぐる議論など、現代のイメージ論や文化論におけるアクチュアルで重要な主題や方法論と関連

し合うこととなった。このような国際的動向を背景として、徴候的知という観点の元にダイアグラム論を追究する展望が開けた。

ケーススタディとして行なったクラヴェル研究は、一次資料の発掘を初めとして、国際的にもいまだほとんどまったく手が付けられていない対象であり、まとまった評伝もこれが最初である。発掘された資料の原語での出版と合わせ、本研究の成果は早急に英語ないし独語で発表する予定である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 20 件）
(1)田中純、世界模型のかけら――「思考のイメージ」としてのダイアグラム、『UP』473 号（2012 年 3 月号）、東京大学出版会、2012 年、55ー61 頁、査読無
(2)田中純、鳥人間の影――ジルベール・クラヴェル『自殺協会』、『UP』470 号（2011 年 12 月号）、東京大学出版会、2011 年、59ー65 頁、査読無
(3)田中純、白い錯乱――ル・コルビュジエの「最初の絵画」をめぐって、『UP』467 号（2011 年 9 月号）、東京大学出版会、2011 年、51ー57 頁、査読無
(4)田中純、希望の寓意――「パンドラの匣」と「歴史の天使」、『UP』464 号（2011 年 6 月号）、東京大学出版会、2011 年、42ー48 頁、査読無
(5)田中純、魔術的洞窟――キースラーのシャーマニズム、『UP』461 号（2011 年 3 月号）、東京大学出版会、2011 年、64ー69 頁、査読無
(6)田中純、表象・身体・生理学――ショーペンハウアーと 19 世紀の視覚経験、『ショーペンハウアー研究』第 15 号、日本ショーペンハウアー協会、2010 年、78ー100 頁、査読有
(7)田中純、閨の王たち――巨人と小人の無垢、『UP』455 号（2010 年 9 月号）、東京大学出版会、2010 年、45ー51 頁、査読無
(8)田中純、プルチネッラの倦怠――増殖する道化たちの歴史性、『UP』452 号（2010 年 6 月号）、東京大学出版会、2010 年、42ー48 頁、査読無
(9)田中純、建てる主体の無意識――建築におけるヴァナキュラー、『SITE ZERO/ZERO SITE』No.3、メディア・デザイン研究所、2010 年、134-147 頁、査読無
(10)田中純、セイレーンの誘惑――南イタリア、神話の呪縛圏（１）、『SITE ZERO/ZERO SITE』No.3、メディア・デザイン研究所、2010 年、354-385 頁、査読無
(11)田中純、卵母セイレーン――誘惑する女たちの深層、『UP』449 号（2010 年３月号）、東京大学出版会、2010 年、40ー47 頁、査読無
(12)田中純、種の魅惑、縮減模型の魂――『野生の思考』再読、『現代思想』第 38 巻 1 号（2010 年 1 月号）、青土社、2010 年、154ー165 頁、査読無
(13)田中純、「星の子供たち」の帰還――占星術の政治的図像学、『UP』446 号（2009 年 12 月号）、東京大学出版会、2009 年、34ー40 頁、査読無
(14)田中純、摩滅の博物誌――W・G・ゼーバルトと古写真の光、『UP』443 号（2009 年９月号）、東京大学出版会、2009 年、36～41 頁、査読無

〔学会発表〕（計３件）
(1) 田中純、Analyses of Urban Representations: Politics, Aesthetics and Poetics of the (Post)-Modern City、Urban Sustainable development in the context of global change、2010 年 10 月 8 日、ベトナム国家大学ハノイ校
(2)田中純、表象・身体・生理学――ショーペンハウアーと 19 世紀の視覚経験、日本ショーペンハウアー協会第 22 回全国大会、2009 年 11 月 28 日、関西学院大学
(3)田中純、生態学的都市論の可能性――「ベンヤミン的方法」における多孔性、第 60 回美学会全国大会、2009 年 10 月 10 日、東京大学

〔図書〕（計３件）
(1) 田中純、伊藤博明、加藤哲弘、ムネモシュネ・アトラス、ありな書房、2012 年、総頁数 765 頁（全体にわたって執筆）
(2)田中純、建築のエロティシズム――世紀転換期ヴィーンにおける装飾の運命、平凡社, 2011 年、総頁数 201 頁
(3)田中純、イメージの自然史――天使から貝殻まで、2010 年、総頁数 316 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
田中　純（TANAKA JUN）
東京大学大学院・総合文化研究科・教授
研究者番号：10251331

(2)研究分担者
（　　）
研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）
研究者番号：